

---

# ネギま～チートな転生者～

モモンガ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギま〜チートな転生者〜

### 【Nコード】

N9461L

### 【作者名】

モモンガ

### 【あらすじ】

神様のミスで死んでしまった白銀白夜がネギまに転生した話です  
更新は不定期ですがお願いします

## プロローグ（前書き）

皆様の感想お待ちしております

## プロローグ

ちわ

俺の名前は白銀白夜しろぎんはくせ

趣味は漫画やアニメ一般的に言うオタクという奴だ。ちなみに今の状況は

「お、いごら、動くんじゃねえーよ」

頭に銃を当てられている！何故こうなったかと言つと事は2時間前に遡る

2時間前

『あー漫画買ったら金が残り少なくなってるな。帰りに銀行に寄つてくか』

そう言つて銀行に行つてお金を降ろしたら

「動くんじゃね、全員手を上げる」

銀行強盗と遭遇してしまった。

「これに金を詰める」

そう言いながら銃を突き付ける

銀行員の女性は恐怖に怯えながらお金を詰めた

「犯人に次ぐ直ちに投降しなさい、ここは完全に包囲した」  
外から警察の警告が聞こえた。

この時は正直助かつたと思つていた

「ちつ、もう来やがったか」

犯人は苦虫を噛んだような表情だつたと思つ

「全員を縛れ」

そう言われ全員手足を縛られて一カ所に集められた  
そして

「おい、その奴を連れてこい人質にしてやる」  
えっ俺！

そして前に戻る

「おい車を用意しろさもなくばこいつの頭に鉛玉を食らわせるぞ」

「待ってくれ直ぐに用意する」

「10分以内に用意し」「ドッ」「」

次の瞬間俺は意識を失った

## 第1話（前書き）

不可解な点や皆様を不愉快にさせてしまうかもしれませんがそれでも  
いい人をお読み下さい

## 第1話

あるえー

『ここは何処だ』

目が覚めたら上下左右真っ白な空間だった。

『俺は銀行強盗に銃を突き付けられてたはずだったよな』  
まあ適当に歩いて見るか

「おー、此処におったか」  
ん、誰だこの以下にも変態そうな爺は

『あんたは誰だ糞爺』

「初対面の相手に随分な物言いじゃの〜」  
そうだな初対面の相手について本音が出てしまった反省しないとな

『それは失礼しました糞』

「謝る気はまるでないの〜まあこっちも謝る事があるのじゃよ」  
はあなんだこの爺は頭がいつちゃってるのか

「お主が死んでしまったのは儂のせいなのじゃ」

『えっ、俺死んだの』

「うむ、本当なら君は死なないで強盗犯が撃たれるはずだったのじや。」

『ならなんで俺が死んだんだ』

「それはじゃなあやつの変わりにお主の魂を刈ってしまったのじや」

おいおいふざけてるんじゃないやあねえよ。てか今更だがお前誰だよ

『お前誰？』

「おお失念しておったわ僕はお主等が神と呼んどうる存在じやよ」

あーこの爺は相当頭いつちやってるんだな

『俺良い病院知ってるからそこに行つてきな』

「まあいきなりお主は死んだと言われても実感はないじやろつ」

まあ何となくそんな感じがしたしな

『はーあ、で俺はこれからどうなるんだ』

「お主が居た世界は身体が無いから無理じやが他の世界なら可能じやよ」

『それって転生つて奴か』

「そうじやな」

おーそいつはいい



『ならネギまの世界は可能か?』

「もちろん可能じゃよ、サービスで魔力はこのか嬢の100倍、気はラカンの20倍とお主の願いを5つを叶えてあげるのじゃ」

はつなにそれチートじゃんかしかもなんでこのかやラカンを知っているだ?

『なら一つ目は容姿はT o L o eの唯見たいな感じで身体年齢を変えられるで』

「ふむいいじゃろうしかしお主は男じゃろうに」

『気にするな髪を縛れば問題無いだろう二つ目はジヨ ヨのスタンドの能力だ。三つ目はBLE CHの死神とアランカルの斬魄刀の能力四つ目は色んな漫画の眼の力五つ目は不老長寿でお願いできるか?』

「まあなんともチート臭いがいいじゃろう儂は許されないような事をしてしまったのじゃからな四つ目の色んな眼とわ車輪眼やギアス等か?」

『ああ』

「それでわ適当に能力を入れといてやろう、それと時間軸はいつぐらいがいいじゃろうか」

『ナギとラカンが会う10年くらい前で』

「ほう、お主なら直ぐに会うと思つたとたんじゃがな」

『貰つた能力を把握しとこうとな後、魔法や戦い方の練習しときた  
い』

「わかつたのじゃ。それではいつてらっしゃいのじゃ」

神さまもとい爺がそう言つと俺の下に穴が出来落ちていった

## 第2話（前書き）

大分おかしくなっただです  
文才が欲しい

## 第2話

あゝ

ただ今私白銀はパラシュートの無いスカイダイビングをしています

『あの糞爺なんて所に送りやがった』

神様こと爺は地上5000mに放り出したのだ飛行術等が使えるならまだしも今は練習も何もしていないのだ。なので重量に従いどんどん下に落下している  
そこで考えた手段が

『よし諦めるか』

考えゆるなかで最もあれな答えを出した  
そしてそのまま地面に「ドカーン」と言う音と共にたたき付けられたのであった

『あれ生きてるしかも怪我の一つすらない。んっポケットの中に手紙が?』

( 拝啓白銀へ

この手紙を読んだ頃は既に地面にたたき付けられた後であろう  
ちなみにあんな所に出したのは己の身体能力の高さを体験してもら  
うためののじゃ

けしてお主に“糞爺”と言われた事に恨みじゃないからの

後アランカルの能力のせいで半悪魔じゃからのそれでわ第二の人生  
を楽しんでおくれよ

それと魔法の発動体の指輪を同封しておく  
by 神より)

『絶対根に持つてるよ  
正直指輪は助かるな  
とりあえず魔力と気を感じる事から始めるか』

） 1時間後

『何となく感じるこれが魔力こつちが気かな』 所謂言えば破面の能力があるんだから虚閃<sup>セロ</sup>とか使えるのか  
まあやってみるか指の先に何かを溜める感じでそれを一気に放つ

キューン（何かが溜まる音）

カツ（何かが放たれる音）

ズーン（前方の山がえぐり取れた音）

おー

すっげー威力だな

やばいな余り派手なのを使うと人が来てしまうな

よし逃げよう

霊圧が使えたんならそれで空中を走れたり出来るはずだ  
此処が何処だかわからないから近くに町でも無いか探すか  
『それにして目線が低いな容姿を変えて貰ったんだよな』  
とりあえず

ヒョイ（棒を拾い立てる音）

ポトツ（棒が倒れる音）

よしこつちに行くか

く 3時間後 く

青々と生い茂る草や木そうここはジャングルだった

『やばいなあ迷ったよまあ此处で斬魄刀の能力を確認すればいいか  
まずは始解でもしてみるか水天逆巻け《掭花》』  
そう言い手に持っていた刀を回転すると刀が槍に変わる

『おー出来たよ。次は解放でもしてみるか』

んー何にしようかな十刃のは強すぎるから駄目だし  
よし決めた

『喰い千切れ《虎牙疾風》』

次の瞬間には両手の甲に刃がついて頭には虎の頭蓋骨見たいのを被  
っていた

くそして修業を続ける事5年く

『大分力を扱える用になったしそろそろ原作入りするかな、キング  
クリームゾン』

と言っても魔法は使え無いまあゼクトに教えて貰うとするか  
そしてナギとラカンが会う日まで時を進めた

## 第2話（後書き）

スタンドの能力を完全に把握していいのでもし間違っていたらご指摘  
お願いします

### 第3話（前書き）

紅き翼の仲間になったところです



### 第3話

（白銀 side）

到着しました

『此処が、5年後か』

て、言ってもジャングルに居るんだから周りなんてたいして変わってない

早く原作キャラに会ってみたい探そうにも何処にいるかなんて検討も付かない

だがただやみくもに探すなんてそんな馬鹿な真似はしないさ

そう俺にはこいつがあるその名も『小枝一号』皆様もござんじの奴、前話で拾った棒ですよ

こいつがあれば探したい物や人はたまた人生の伴侶やらを見つける事が出来るのだ

だがこいつの搜索率は0%だそれでも俺はこいつを信じる

よし日頃の行いと美少女への思いを込めていざ

コト（棒を立てる音）

バタ（棒が倒れる音）

よし左だな

そして棒を拾い進んで行った

くナギ side

おつす俺は紅き翼アラルブラの最強の魔法使いの千の呪文の男サウザンドマスターことナギ・スプ  
リングフィールドだ  
今は連合と帝国で戦が起こっているんだ

「それにしても腹が減ったな」

「そうですね（じゃな）（だな）」

こいつらは俺の仲間だ

青山詠春とアルビレオ・イマとゼクトだ

詠春は神鳴流て言う流派を使うお堅い奴だ

アルは重量魔法を使う胡散臭い奴

ゼクトは俺の魔法のお師匠だ

「食事は休める場所があったら」「ガサツ」誰だ！」

くナギ side out

く白銀 side

はーまた迷った

本当に紅き翼の皆さんに会えるのかな

んっ前方に人らしき物が見える

と言っかお腹が空いたここ数日ろくにたべてないからな、まあ行っ  
てみるか

どうせなら気配を断って近付く

あっ重大な事に気が付いたどうやって仲間フラグを立てよう

- 一・迷ったと装い接触
  - 二・奇襲をかましてみる
  - 三・怖い人に襲われていると言って接触
  - 四・得に思い付かない
- さあどれにしようか二、三、四は論外だな  
妥当に迷ったと言って会うか

よし行くか

「食事は休める場所があった」「ガサツ」誰だ！」

そう詠春が言つと全員こちらを向き敵意を出してきた

『いや敵じゃあ無いからそんな警戒しなくても』

まあ年齢15ぐらいの女みたいな容姿をした奴が一人でいたら誰でも警戒するだろう

「お前は人間かそれとも悪魔か」

ナギがそう言った時正直驚いた魔の力は完全に隠しているからだった

『よく分かったな』

さあここからどうすれば仲間になれるか悪魔とばれるとわかってな  
かったからだ

「ふーんお前強いのか」

『それなりにな』

「だったら俺達の仲間にならないか」

えっ俺仲間フラグを立てたっけ

「いいのか自分で言うのもあれだが凄く怪しいぞ」

「ああお前面白そうだからな皆も良いよな」「私は良いですよ男ば  
かりでむさ苦しいですし」

「わしもいいぞ」

「みんながよろしいならいいんじゃないかあ無いんか」

『それではこれからよろしくお願いします』

こうして俺は紅き翼の一員になりました

『自己紹介をしてなかったな俺の名前は白銀だ』

「俺はナギ・スプリングフィールドだ」

「わしはゼクトじゃ」

「私は青山詠春」

「私はアルビレオ・イマです、ちなみにこれ付けてみませんか」

そう言って手渡して来たのはネコ耳だった

『別に良いけど、俺男だぞ』

言った瞬間全員目を見開いてた

## 第4話（前書き）

ラカン仲間入りです

## 第4話

く白銀 side

やっときましたご飯の時間なんとお鍋です。しってたけどね。

「んっふっふっこいつが旧世界は日本の鍋料理って奴かあ。じゃ、早速肉を〜」

「あっ！ナギおまつ 何肉を先に入れてるんだよ」

「トカゲの肉でも旨いのかの？」

五月蠅い食卓だこと

「いいじゃねえか旨いもんから先だよ。ホラホラ」

ナギは肉をどんどん鍋にいれていく俺も野菜より肉派だしな詠春以外みんな肉派だよな

「バツ、バカ火の通る時間差というものがあつてだなまずは野菜を入れて あーちよッ」

「あーうっせ、うっせーぞえーしゅん」お前も十分うっせけどな

「フフ 詠春知っていますよ。日本では貴方のような者を「鍋將軍」と呼び習わすそうですね」

「ナベ・シヨーゲン!？」

「っ 強そうじゃな」

「わかったよ 詠春俺の負けだ。今日からお前が鍋將軍だ」

「全て任す好きにするが良い」

んっ 鍋將軍じゃなくて鍋奉行だった気が？

「おお何じゃこのソースうまいぞ？」

「ホントだうめえっ!？」

「これこそが日本が誇るしょうゆだよ」

「これがしょうゆかスゲエうめえってっ何泣いてるんだよシロガネ」

『いやものすっつごく懐かしい味で感動してた』

思えばこの世界に着てからろくな飯を食ってなかったからな。じゃあ何を食ってたってそりゃ適当な獲物を狩って丸焼き等だったな

「何お前も日本にいたことがあるのか？」

『ああ数ヶ月しかいなかったけどな』

嘘です。生粋の日本人です

『それとアルとゼクトにお願いがあるんだけど』



「なんです(じゃ)」

『俺に魔法を教えてください』

「なんじゃお主は魔法がつかえないのか」

そりゃあ魔法の修業なんかしなかったからな

「でも貴方からは余り魔力を感じませんね」

そうだった魔力は殆ど抑えこんでたからな

『あー俺魔力は有るけど魔法が使えないから抑えてるんだよね』

「なら解放してみるよまあ俺以下だろうがな」

ナギが笑いながらそう言って来た。

正直イラッてきた

『なら解放するぞ』

〈白銀 side out〉

〈ナギ side 〉

『あー俺魔力は有るけど魔法が使えないから抑えてるんだよね』

ほーてつきりまったく魔力がないから気と魔の力を使う奴かと思っ  
てたぜ

まあ解放しようと思俺様には遠くおよばないとおもってた

『なら解放するぞ』

そう言った途端に魔力がとめどなくシロガネから溢れ出てきた。俺  
の魔力より遥かに多かった。俺とアル、ゼクトを足しても（詠春は  
除外）足元にも及ばない量だった。しかも気も抑えてたんだな解放  
したら気も濃くなった

「……ッ！」「」

他の奴らを見たけど全員驚いてやがる。仕方ないっちゃんあ仕方ない  
なんせ俺もここまでと思っても見なかったからな  
急に魔力と気が無くなったどうやらまた抑えこんだらしい

『どづだった』

「さすがだなやっぱり仲間にしてよかったぜ」

「では魔法は儂が教えてやろうこの馬鹿弟子一号より覚えも良さそ  
うじゃな」

そうして食事に戻ってから少ししたらいきなり大剣が降って来て鍋

に当たった。みんな鍋の肉だけを取ってたもちろん俺も肉だけとった

「食事中失礼〜ッ

俺は放浪の傭兵の剣士ジャック・ラカン！〜いっちょやろっぜッ」

なんか浅黒い筋肉が丘の上にいた

「何じゃ？あのバカは」

ゼクトがそう言い俺は詠春の方を見た

「えいしゅ むお!？」

詠春は頭から鍋を被っていて持っていた箸は一本折れていて不気味に「フ フフフ」  
と笑っていた

「フ 食べ物を粗末にする者は」

「どーしたー来ねーのかぁー来ねーならこっちから」

そう言った直後に詠春は筋肉に切り掛かった

「お？詠春の攻撃凌いでるぜ」

俺はそう言いながら取っていた肉を食べた。他の奴らも見ながらたべていた

「あの男やりますよ。見たことがあります。ちよつと前南で話題に

なつた剣闘士ですよ」

「ちよつタンマタンマあんたマジでつええなちよい待たね？」

「ふざけるなつ、やる気なら本気を出せ貴様ツ！」

「へっソースか、けど5対1だし本気出す訳にはいかんのよね。髪  
の長い女以外の情報はリサーチ済みだぜっ！？」

髪の高い女？シロガネの事かまあ間違えるのもしょうがねえな。普通  
の女よりも美人だしな。そんなことよりもそう言つて投げたのは  
四つのカプセルだった中からは巨乳の女性が出てきた何故か一人だ  
け幼女気味だったその頭に保険と書かれた紙がくつついてた

「情報その1・生真面目剣士はお色気に弱い」

女性達は詠春に抱き着いていた。詠春は顔が真っ赤になつていて

「くつ 卑劣ないや、何のこれしき心頭滅却すれば火もまたー」

などと言つていた

結局詠春は幼女気味の奴にタヌキの置物のような物で頭をやられて  
しまつてた

「ホイー丁あがり」

そいつに向かつて魔法を放つたが簡単にかわされた

「おう出たな情報その4、赤毛の魔法使いは弱点なし特徴無敵」

「てめえら手エだすなよ」

そう言い俺はラカンに向かって行った

くナギ side outく

く白銀 sideく

「てめえら手エだすなよ」

いや言わずとも手なんかださないっつーの。アルもゼクトも

「言われずとも」

「バカの相手はバカにさせるのが一番じゃ」

と傍観している

「じゃあ今のうちに魔法を教えてやるかのお」

おっマジですか

― 3 時間後 ―

「貴方もバグキャラでしたか」

そうアルに言われた。まあしょうがないと思う何故なら3時間で雷の斧や紅き焰を使える用になった

この調子なら後10時間で雷の暴風や千の雷使えるんじゃないかね

ちなみにナギとラカンはまだ殺り合ってる

結局ナギとラカンの勝負が終わった頃には雷の暴風は使える用になった千の雷は後少し掛かる見たい

そのあとなんやかんやあつてラカンが仲間になった

ラカンに俺は男と言ったら案の定目を見開いて驚いていた

## 第5話（前書き）

反逆者になる所までです

## 第5話

（白銀 side）

ついにやってきた「グレード＝ブリッジ奪還作戦」最終決戦を抜かせば1番でかい戦争だやっとな自分の力を使う

『いやー敵多いなまるでゴミようだ』

「ホントだぜ」

結果は勿論

楽勝でした

この一大決戦で戦況は大逆転連合は勇躍敵軍を押し戻し帝国領内へ躍進した

ちなみにナギと俺のファンクラブが出来た。

ラカンのはとつくに有ったらしい

それとガトウとタカミチ少年が仲間になった

やっぱり俺は男と言うと驚いていたタカミチ少年に至っては残念そうにしていたなんでも俺の事を好いていたらしい。俺はそっこの趣味はないしね

後俺にも二つ名が付いた「死神」「鏢鳴り」「悪魔っ娘」等だ

死神と呼ばれる理由は多分敵は全て刈ってたからだとか鏢鳴りは居合斬りを使って鞘に戻した時に鳴る音がしたときは既に斬っているからだ。



詠春に神鳴流を教えて貰いそれを音越えで使ってる

不可視の斬魔剣とかマジ面白かった

詠春は啞然としていた

ナギとラカンは勝負しようぜと言ってくる

悪魔っ娘は見た目だろう

アルがたまにコスプレを強要してきてそれを着てるからなこれからは控えるか

「俺の故郷がある旧世界じゃ超強力な科学爆弾が発明されてこんな大戦はもう起こらねえそうだ。戦を始めたが最後みんなまとめて滅んじまうからだってよ。だがこっちの戦はいつ終わる？帝都へラスまで攻め滅ぼすってか？やる気になりやこの世界にだって旧世界の科学爆弾以上の大魔法はある。こんなこと続けてどうなる？意味ねえゼツ！！まるで」

「ーまるで誰かがこの世界を滅ぼそうとしているかのようだしーですか？」

ラカンはぼくくんとしてどうでもいいと言う顔をしていた

「ーある意味そのとおりかもしれないぞ」

「ガトウ」

「俺とタカミチ少年探偵団の成果が出たぜ」

あーフェイト君たち御一行ですわわかります

「やはり奴らは帝国・連合双方の中枢にまで入り込んでいる秘密結社「完全なる世界」だ」

『何だよガトウわざわざ本国首都まで呼び出して』

まったく面倒だ、ああ面倒だ。重要なので二回言いました。

「あつてほしい人がいる協力者だ」

「協力者？」

「そうだ」

皆様もご存知のこの方

「マクギル元老院議員！」

こいつじゃねえよ

「いやわしちゃう主賓はあちらのお方だ」

ならなんでお前がいるんだよ

「ウエスペルタティア王国　アリカ王女」

ナギはまじまじと王女を見ていた。

「ワハハハ上手いことやりやがってこんガキヤ！」

「ああ！？何の話だ！？」

「とぼけんじゃねーよお姫様とイチヤイチャキヤイキヤイおしゃべりしてたろーがッ！」

「してねっつの何がイチヤイチャだバカ」

「なーに言っただよ俺なんか「気安く話しかけるな下衆が」だぜ  
〜〜？ いやありやイイ女だぜー本芯の通ったな」

「頭大丈夫かジャック？マゾかアンタ？俺あんなおつかねえ女見たコトねえぞ」

「グハハハハそーゆートコはまだまだカワイイガキなんだよなてめーはよ」

「んっだそりや意味わかんねえ触んなっつーの勝負すっかてめ」

うるせー詠春も遠い目でみてるぞ

「しかしよウエスペレティアの王女ってことはアレか？例の姫子ちゃんの姉君ってことかよ？」「いや 姫子ちゃんのこととは なんか話しくいみたいだった」

姫子ちゃんて後のアスナだよな

「へえ？」

「アリカ姫 か」

「帝国」と「連合」二つの巨大勢力に挟まれて翻弄され続けてきた王国の王女、アリカ・アナルキア・エンテオフユシア殿下  
彼女は自ら調停役となり戦争を終わらせようとしたが力及ばず俺達に助けを求めてきたんだよ

「要するに戦争やりたいやつらがいるんだろまーた「あいつら」か！？」

「「完全なる世界」 帝国・連合だけでなく歴史と伝統のオスティア内部にまでシンパがいるようだ」

「世界全てが彼らに操られているようです やはりこれは思った以上に根が深い」

「完全なる世界」 この謎の集団を当初俺達は国際マフィアや死の商人 つまり「戦争があると儲かる」奴らが作った組織だろうと踏んでいただけ

その真の正体は謎のままだった

そこで俺達は休暇中

「完全なる世界」についての独自の内偵を開始した

といつても

ラカンやナギはどう考えても調査向きじゃなかったからもっぱら他の紅き翼に任せだった

俺、俺は時ならぬカジノを楽しんだぞ

ラカンはバカンスを楽しんでたその時に「買い物に付き合え？何で俺がツ「バチーン」」ナギもそれなりに首都での休暇を楽しんでいた と思う

思えばこの時からだろうかナギが出掛け帰ってくる度に頬に紅葉を付けてくるのは

「まさか こんな」

「ようガトウどうしたい深刻な顔しとよ」

『ガトウそんな深刻な顔してると老け顔が更に老けるぞ』

「ああラカンにシロガネいや遂に奴らの真相に迫るファイルを手に入れたんだがそれとシロガネそれは言うな」

なんか落ち込んでる気にしてたんかな

「これがどうにも信じがたい内容でな。いや情報ソースは確かなんだが」

『なんか興味なさそうな話だから外行ってくる』

「おいシロガネはーまあ一応続けるぞ信じていいんだか悪いんだがしかしこれが確かなら奴らの行動も」

「んだガトウハッキリしねえなもつとわかり易く言えや」

「いや言ってもあんたにや興味ない話しだよ多分それよりこっちの方が深刻だこの男も「完全なる世界」との関連の疑いが出てきた大物だよ」

「こいつは今の執政官じゃねーか！メガロメセンブリアのナンバー2までが奴らの手先なのか！？」

「確証はない外で喋るなよ？」

『なんでこんなに詠春が怒ってるんだアル？』

「ええなんでも王女をつれまわし敵の本拠地を壊滅させてきたそうですよ」

その後アリカ王女は帝国第三皇女に接触しに行った。その時にナギは叩かれ両頬に紅葉を付けられてた

ナギ達は証拠品を持って行ってそしてフェイトに嵌められて紅き翼御一行はお尋ね者になった

ちなみに俺とゼクト、アルに詠春タカミチ少年は俺の転移魔法で夜の迷宮に向かった

第6話（前書き）

テンプレが嫌な人は戻るを



## 第6話

（白銀 side）

夜の迷宮にアリカ王女とテオドラ皇女を助けにきました

『「よう来たぜ姫さん」』  
ナギと同じ事を言ってみたら俺だけ叩かれた理不尽だ

「何だこれが噂の「紅き翼」の秘密基地か！どんな所かと思えば掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してたんだこのジャリはよ」

『よせジャック、こいつ頭いつちやってるんだよ』

ラカンがイラッとしていたのでそう諭してやった

「何だ貴様等無礼であろう」

「へっへ〜ん生憎ヘラスの皇族にや貸しはあっても借りはないんでね」

と言いどっかに行ってしまった。てっ事は俺がこの皇女の相手をし

なくちゃいけなくなっちゃうじゃねえかそう思い逃げようとしたら

「さてその餓鬼何処に行くつもりじゃ」

と捕まってしまった

『うっせ俺は餓鬼じゃねえよ仮に俺が餓鬼だったらお前はおばさんだな』

「何い？貴様何物だ。しかもまだおばさんではないわ」

『俺は白銀だ。まあ「死神」や「魔王」と言われる方が多いな』

そう言えばさらに二つ名が増えたんだよね

〈白銀 side out〉

〈ナギ side〉

「あのやけに元気な少女が」「ええヘラス帝国第三皇女ですね。

アリカ姫と交渉の為出向いた所を一緒に敵組織に捕縛されていたのです」

「さーて姫さん助けてやったはいいけどこっからは大変だぜ。連合にも帝国にも あんたの国にも味方はいねえ」

「恐れながら事実です。王女殿下。殿下のオスティアも似たような状況で 最新の調査ではオスティアの上層部が最も「黒い」という可能性さえ上がっています」

「やはりそうか 我が騎士よ」

「だからその「我が騎士」って何だよ姫さん。クラスでいったら俺は魔法使いだぜ？」

まったく姫さんは俺のことを「我が騎士」と呼ぶ。ハズかしくてしかたがないぜ

「もう連合の兵ではないのじゃろならば主は最早私のものじゃ」

「な」

俺は姫さんの「もの」にされちまったらしい

「連合に帝国 そして我がオスティア世界全てが我らの敵という訳じゃな。じゃが 主と主の「紅き翼」は無敵なのじゃろ？」

姫さんがそう言うとジャックが自分を指差して「ん？無敵？」と言っていた。馬鹿ぬかすんじゃないやねえ無敵は俺に決まってるじゃねえか

「世界全てが敵ー良いではないかこちらの兵はたったの8人だが最強の8人じゃ」

「ならば我等が世界を救おう。我が騎士ナギよ我が盾となり剣となれ」

「へ、やれやれ相変わらずおつかねえ姫さんだぜ」

「いいぜ俺の杖と翼あんたに預けよう」

そして俺の肩に剣が置かれた

ナギ side out

白銀 side

その後敵味方の判別やら難しいことは頭脳労働担当と敵と判明した奴らをブツ潰す肉体労働担当に分けた。勿論俺とナギ、ラカンは肉体労働担当になったまあ当たりだがな

敵のほとんどは戦で儲けを狙ってた武装マフィアに武装商人私腹を肥やしてた役人だったけどそいつらは「完全なる世界」の中でも雑魚も雑魚だった。だって虚閃で殆どの奴は一撃でやられてたしねそろそろ虚弾でも使うかと思ったりもしたで真の敵はやっぱりフェイト君御一行でした

その後も俺達は大活躍だった！ラカンが言っていた通り映画なら3部作、単行本なら14巻分くらいは行く6ヶ月の死闘の後遂に奴らの本拠地を突き止め追い詰めた本拠地の場所が世界最古の都、王都オスティア空中王宮最奥部「墓守り人の宮殿」！！！！ここがラストダンジョンでした

「不気味なくらい静かだな奴ら」

「なめてんだろ悪の組織なんてそんなもんだ」

『これからどうなるかも知らないでいい気味だ』

「ナギ殿、帝国・連合・アリアドネー混成部隊準備完了しました」

おっ若き日のセラスタんだやっぱし綺麗だねー

「おうあんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ」

「ハッそれである ナギ殿」

「ん？」

「ササ、サインをお願いできないでしょうか」

「おお？ああいいぜそれくらい」

「そ尊敬していました」

ラカンはウハハハ笑っていたまあ緊張感がまるでないな

「連合の正規軍の説得は間に合わん帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう」

「決戦を遅らせることはできないか？」

「無理ですな私たちがやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

「ええ彼らはもう始めています」「世界を無に帰す儀式」を世界の鍵「黄昏の姫御子」は今彼等の手にあるのです」

「ああ、よおしつ野郎ども行くぜっ!!」

そうナギが言い向かって行った。だけど俺だけいなかったなのでナギと一緒にフェイトをやったそしてナギが右手でフェイトの首を持っていて

「見事 理不尽なまでの強さだ」

「黄昏の姫御子は どこだ？消える前に吐け」

と言つやり取りをしていた

「フ フッフ まさか君はいまだに僕がすべての黒幕だと思っているのかい？」

「なん だと？」

バスツと言つ音と共に光線が二人の身体を貫いた  
あっライフメイカーがいたんだっけ

俺は

『鎖せ・黒翼大魔』

と解放した

そして前方からゆらっとライフメイカーが現れた

ゼクトはいかんツと最強防護を発動させた

俺は黒い翼でみなをガードしたが翼と両腕が消し飛んだゼクトの防護も砕け散りラカンも両腕がもげた

詠春もナギを守って重傷だった

俺は始めて腕がもげた痛みなどで気絶していた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9461/>

---

ネギま～チートな転生者～

2010年10月11日01時14分発行